

「置き工具」×アプリでDX推進

トラスコ中山、在庫管理を楽に

機械工具卸のトラスコ中山を遠隔で確認し、商品を補充

すればよい。利用状況はすべてアプリで記録され、使った分だけ後払いする。

は置き薬（配置薬）の仕組みを応用した工具や消耗品の調達サービス「MROストックカー」を始めた。製造現場の必需品を先回りして敷地内に取りそろえ、顧客は必要なものをその場で後払いで使える。

ネジやくぎの本数や、安全靴など人によって交換のタイミングが異なる消耗品の在庫は管理が難しかった。アプリを使うと在庫を自動でデータ化するため管理の手間が省ける。利用履歴が可視化され、無駄な発注の削減にもつながる。またよく使う商品をストックしておくことで「納期を気にせず必要なときに必要なものを使うことができる」（MROサプライ東京支店の八島剛志支店長）という。

大な数の受注を積み重ねていることを生かし、デジタル技術を積極的に活用している。今後はMROストックカーなどで蓄積したデータの活用を進める。業種や天候ごとに使われる資材の傾向などを分析して、商品開発につなげることを検討しているという。

アプリを使うことで発注や在庫管理にかかる業務の手間を省けるのが特徴だ。ものづくり現場の生産性を高められるとして訴求し、蓄積されるデータの活用も検討していく。

現在は普及に力を入れている。これまでにゼネコンの建設現場やメーカーの工場など18カ所で導入されており、利便性の高さから好評だ。

同社のデジタルトランスフォーメーション（DX）について、デジタル戦略本部長を務める数見篤取締役は「はじめてのことにも積極的にチャレンジする企業文化があつてこそ」と話す。8月には経済産業省と東京証券取引所が同社を「DXグランプリ2020」に選定した。

同社の「置き工具」、MROストックカーでは、あらかじめ決めた工具や消耗品の品目を、販売店が敷地内の棚に納品しておく。メガネや長靴、ドリルなどがよく置かれており、新型コロナウイルス感染拡大の下ではマスクや防護服も増えたという。

顧客は利用時に専用アプリでバーコードをスキャンする。在庫数がデータ管理されており、減ると自動で発注する仕組みだ。販売店はデータ

MROストックカーの肝となるのが専用アプリだ。同社は39万点の商品の在庫を抱え、一つ一つは小さいながらも膨

豊富な在庫と独自の物流網で短納期を実現した。DXにも取り組むことで、必要なときに必要なものを必要だけ届ける実力によりいっそう磨き

をかける。（斎藤さやか）



アプリでバーコードをスキャンし、在庫を管理する



工場や建築現場の敷地内に工具や消耗品を常備する